

建築家・沖種郎の生物学的視点についての研究
「非単位空間論」と今西錦司の「棲み分け理論」との関係性をめぐって
A Study of Oki Taneo's Biological Perspectives
Relation to the “Un-Unit-Space” and Imanishi Kinji's “Habitat Segregation Theory”

○佐々木迅¹, 田所辰之助²

*Jin Sasaki¹, Shinnosuke Tadokoro²

As Oki states in his design principles, “Never lose the biological perspective,” there are glimpses of biological thought in his discussions. Through Oki's biological viewpoint, which differs from that of Metabolism, we discover the development of architectural thought and its relationship to the Kyoto School.

1. はじめに

沖種郎(1925-2005)は、丹下健三研究室に在籍した後に、設計連合を設立(1961)し、公共建築や都市計画などを中心に戦後の建築業界で活躍した。また建築設計だけではなく、建築教育や尊厳死についての分野にも携わった。これら幅広い分野での実務を経て、沖の思想は多方面で開花し、多数の論考が残された。沖は自身の設計主旨の中で「生物学的な視点を失わないこと」を挙げているように、彼の論考の中には生物学的な思想が垣間見える。沖が提唱した生物学的な視点を通じて、建築思想の展開や他分野とのかかわりを発見する。

2. 研究方法

沖種郎の生物学的思想、今西錦司といった京都学派からの影響を分析し、沖の建築思想の総体を把握する。

3. 非単位空間論の概要について

沖種郎の設計思想を読みとく中で、最も重要なものが博士論文『非単位空間論-行為によって別れる空間の二つの相-』である。今回は、「非単位空間論」各章において沖が述べている主張を整理する。

第一章「単位化の問題点」では、近代合理主義の大きな武器であった「単位化」は

1. 主体の明確化
2. 領域の隔離化
3. 機能の整合化

という三つのベクトルを持つものであると定義した。そして各問題点・解決法を次のように指摘する。

1. 建築の主体であるはずの利用者が阻害され、利用者意識を無視した業務上の営利性が優先されている。
2. 領域の隔離において、ハードな空間的隔離だけではなく、距離・記号的隔離を用いたセッティング手法
3. 人間の行為などによる、単位化できない受容器としての空間の確保

第二章「空間の両義性」で沖は人間の行為を空間として捉える環境心理学の分野に着目し、美学的属性にとられた機能主義ではなく、人間の行動的空間としての空間の必要性を主張している。また、空間における物理的セッティングが、表層的な現象として人間の行動に直接影響を与えると同時に、社会的・文化的セッティングが深層的認識として人間行為に関係しているという両義性を、環境心理学の面から指摘している。

第三章「行為によって別れる空間の二つの相」では、単位空間と非単位空間についてより具体的に論が展開されている。まず空間を分節するための手法として、壁などで物理的な分節を行う「空間的隔離」、動物のテリトリーや部落などで用いられる「距離的隔離」、そして結界や床の間の下り壁、すだれなどの、隔離として有効性を持つには、意味を理解しこれを守る約束事が必要である「記号的隔離」の三つに分けられるとした。また、約束事の範囲内で行われる「記号的隔離」は最も自由な行為が許される隔離であると位置づけており、これら三つの隔離が支配する領域を区別することが空間の機能性とアメニティを両立させる手法であるとしている。

さらに、第二章で述べたような空間と行為の対応関係を「知覚的」・「社会的」・「創造的」・「時間的」性格の四つに分類し、各行為からさらに二つの行為を抽出した。それらを「空間的隔離に支配される行為」と、「ソフトな約束事に支配される行為」に振り分け、前者を「単位空間」、後者を「非単位空間」と定義している。また沖は最後に、非単位空間の構成要素以下の六つを挙げている。

- | | | |
|-----------|---|-------------|
| 1.ファサード | : | 空間的枠組みの外的表現 |
| 2.吹き抜け | : | 空間的枠組みの内的表現 |
| 3.外部空間の包摂 | : | 外部空間の内化的表現 |

1: 日大理工・院(前)・建築 2: 日大理工・教員・建築

- 4.透明の屋根 : 室内空間の外化的表現
- 5.床のレベル差 : 隔離の記号的表現
- 6.道行き : 隔離の距離的表現

Table1. 行為の性格 (筆者作成)

行為の性格	単位空間 空間的隔離に支配される行為	非単位空間 ソフトな約束事に支配される行為
知覚的性格	求心的行為	通心的行為
社会的性格	個別的行为	全体的行為
創造的性格	構成的行為	創造的行為
時間的性格	モノクロニクな行為	ポリクロニクな行為

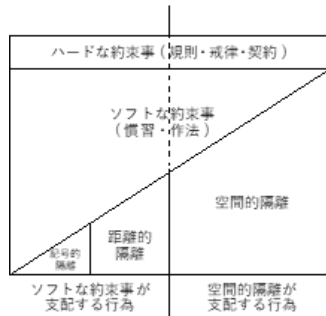


Figure1. 行為と隔離の関係性 (筆者作成)

4. 今西錦司の棲み分け理論と沖の論考との関係性

今西錦司は京都市人文研に所属した文化人類学者である。今西は、ダーウィン進化論の「自然淘汰」や「適者生存」といった排他的な法則を否定し、カゲロウの観察から種社会がそれぞれの生活の場を棲みわけるといふ「棲み分け理論」を発表した。そして、水温や気温の違いによる大地域的な棲み分けを「第Ⅰ同位構造」、流速の違いなど、小地域内にみられる場所の違いを「第Ⅱ同位構造」とし、空間的棲みわけとした。対して生活史のずれを通して、同地域で見られる棲み分けを「複合同位社会」と定義し、時間的棲みわけとした。

Table2. カゲロウ幼虫の生活の場の違い (筆者作成)

底質	泥または砂	小石	礫	
生活形	A 埋没的	B 自由遊泳的	C 弱浮行的	D 強浮行的

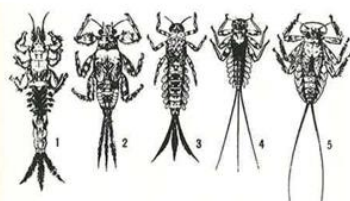


Figure2. カゲロウ幼虫の生活形 (『生物社会の論理』)

今西は生物の生活様式を、「その生物の形態と、その生物の生活の場を通して把握する」とし、これは人間の行動から空間を捉えようとした沖の非単位空間との類似性がみられる。また沖の論考には今西の言及が複数なされており、「種間コミュニケーション」では「さまざまな動物の中に人類の投影を見出す努力をするべ

きである」と述べた際に京都市人文研のチンパンジー研究に言及している。また「史都計画」の中では、「経済的な効用価値」と「文化的存在価値」という二つのモノサシをさらに細かく分類し、「棲み分け」の原理を用いてゾーニングを行うべきだと主張している。この「史都計画」で用いられた大地域的な棲み分け論を、今西的な解釈で捉えると「第Ⅰ同位構造」に該当するだろう。さらに沖は「非単位空間論」の「おわりに」の章で、「史都計画」においての都市文化の保存と開発を「経済的効用価値」と「文化的存在価値」の支配的な領域に分けることによって構造化した方式を、非単位空間論の空間理念では「価値観による分類と、相互の関係を「行為」を基準にして考察した」と述べているため、「非単位空間論」は「史都計画」と連続しており、扱うスケールを建築のレベルにまで縮小した（今西的解釈では「第Ⅱ同位構造」のような）計画といえる。

今西は棲み分け論において、棲み分けた種同士がその領域の境界において対立しているわけではなく、「同位社会は、お互いに相対立しながらも、一面では相補いつつ、それでもって、いま一段と位階のあるいは次元の、高い社会を構成するものである」としている。非単位空間論における隔離の表現の要素である「床のレベル差」、の中では、祭壇や座敷と床の関係など、わずかな床のレベル差が象徴的に空間を区切る結界の手法として機能していると指摘する。これは各レベル差による棲みわけが、高次元の社会を構成するうえで重要であることを示している。また沖は、「床のレベル差」が空間の垂直変化であり、「道行き」は水平変化であると述べており、今西が植物社会において示した高度差による棲み分け、カゲロウの水平的な棲み分けを行った点との類似性が考えられる。

5. 結論

「非単位空間論」について、沖の論考を参考にしながら、今西錦司の「棲み分け論」との関係性を発見し、沖種郎の建築思想の一部を生物学的な視点から分析することができた。

6. 参考文献

- [1] 沖種郎「非単位空間論-行為によって別れる空間の二つの相-」1980年、東京大学工学系研究科博士論文
- [2] 今村友里子「沖種郎の建築思想の展開」日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）2021年9月
- [3] 沖種郎「種間コミュニケーション」『近代建築』、第24巻6号、1970年6月、pp.59-62
- [4] 沖種郎「保全と開発の接点」『北方圏』、第10号、1975年10月、pp.61-65
- [5] 菅原潤『京都学派』講談社文庫、2018年
- [6] 今西錦司『生物社会の論理』平凡社、1994年